

## 2001年度日中医学協会共同研究等助成事業報告書

—日本人研究者派遣—

2001年 11月 20日

財団法人 日中医学協会  
理事長 殿

訪中者氏名 佐々木 一之   
所属機関名 金沢医科大学  
部署・役職 眼科・名誉教授  
所在地 〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学1-1  
電話 076-286-2211 内線 3956

1. 中国側招請機関名 中国医科大学  
所在地 中華人民共和国遼寧省瀋陽市和平区南街  
招請責任者氏名 金 魁和 職名 学長

2. 中国滞在日程 (訪問都市・機関名等主な日程を記入して下さい)  
遼寧省瀋陽市 中国医科大学 眼科学教室

第1回訪問：2001年4月1日～4月8日  
第2回訪問：2001年6月5日～6月12日  
第3回訪問：2001年7月20日～7月27日  
第4回訪問：2001年9月21日～9月28日  
第5回訪問：2001年10月22日～10月27日

### 3. 交流報告書

別紙報告書作成要領に準じ、講演・指導内容、訪問地の状況・課題、今後の交流計画等を報告して下さい。

講演・手術指導等の写真を添付して下さい。

※訪中記等発表に当っては、**日中医学協会助成金**による旨を付記して下さい。

※決算報告書(書式自由)を添付して下さい。

## 交流報告書内容

交流報告は以下の項目に従って記載する。

1. 中国医科大学長期（連続）訪問意図の背景
2. 訪問地での活動内容
  - I、 医学部学生への眼科学講義
  - II、 眼科学大学院学生への研究指導
  - III、 眼科学レジデントへの臨床教育
  - IV、 眼科医師全般への臨床教育
  - V、 眼科教室と金沢医科大学・国立環境研究所との共同研究準備
  - VI、 地域（遼寧省、瀋陽市）眼科医への指導{講演を含む}

### 1. 中国医科大学長期（連続）訪問意図の背景

中国医科大学と私自身の交流は 1980 年代初めにさかのぼる。現中国医科大学は戦前の旧満州医科大学の施設を母体として発足した大学であったこと、私の亡父がその旧満州医科大学の眼科教授であったこと、また私が瀋陽生まれで小学時代の半ばまで瀋陽市で過ごしたことなどから、亡父または私自身を知る多くの眼科関係者が中国医大を含めた中国各地におられたこともあり、日中医学交流が始まった初期の頃から中国医大をはじめとする幾つかの中国の大学眼科関係者の方々と交流を始め現在に到っている。これまでに 10 数名の中国人眼科医を私の主宰する金沢医科大学眼科学教室に招き、主に私の研究テーマである水晶体・白内障の研究につき指導をしてきた。初期の留学生の中には既に何名かが眼科教授として中国の眼科学会で活躍している。今回長期の滞在を予定した中国医大眼科学主任の張 勁松教授もその一人である。

私は 2001 年 3 月末をもって金沢医科大学眼科学教室主任の席を退くのを機会に、中国医科大学 金 学長および眼科学講座の張 主任教授より、これまでの客員教授とは異なる立場で長期滞在し、臨床領域に比べ未だ進歩の遅れている研究領域の指導と、同大学日本語コース学生に生の日本語での授業を担当して欲しいとの要請を受けた。

日中医学協会の評議員も長く勤めさせていただいてはいるが、実質、協会の仕事もこれまではしていなかったこともあり、特殊なケースであることは承知の上で協会事業の一つである日本人研究者派遣助成事業に応募させていただいた。

訪問地での活動内容は、私自身の研究継続の目的もあり多岐にわたっているが、報告規定に従い各項につきその概略を以下に報告する。

## 2、訪問地での活動内容

### I、医学部学生への講義

眼科学の講義は学部4年生の学生（日本語コースの学生は、1年次は日本語のみの授業を受けるため実際は5年生）が対象である。講義内容は12コマで、3月末までには既に大部分が終わっていたため、3コマ（緑内障、ぶどう膜疾患、水晶体疾患）を行った。1コマは途中休憩を入れて実質120分、時間的には充分であった。学生のもつ教科書は中国語で書かれたもので、現在日本の医学生が使う教科書を持つ者はおらず、授業担当者が作ったプリントを教科書としていた。講義はできる限りゆっくりとわかりやすい言葉でOHPを使いながら行ったがそこで使用した教材はすべて学生に残してきた。中国教科書には疾患を示す画像が非常に少ないことも聞いていたので、できる限り疾患の画像も供覧した。日本語コースの学生とは言え講義もこみいった内容になると理解し難いようであったため、そのような事項は同席してもらった中国人教員に中国語で補足してもらう方法を採用した。また、医学生としては必要な英語の医学用語は可能な限り日本語と併用して覚えてもらった。休憩時間は学生との雑談を含めた質問時間にあてた。最初は学生も緊張していたせいか会話ははずまなかったが、2回、3回目の授業では学生からの積極的な接触があった。総じて日本の学生とくれば講義の時間内に多くを学び取ろうとする意欲はこちらにもよく伝わってきた。授業開始は朝8:00であったが、開始時間には全ての学生が揃っていたこと、授業中学生の私語を聞かなかったこと、当然のことではあろうが久しく経験しなかったことだけに、授業する私も普段以上熱がはいったような気がした。間もなく今年度の授業もはじまるので、前回以上の準備で学生に応えたいと思っている（写真1、2、3）。

### II、眼科学専攻大学院学生への研究指導

卒業した学生が直接母校の眼科学教室で研修することは出来ないと聞く。毎年何名かの大学院生（修士課程、博士課程）が選抜され、この学生のみが大学での研究、研修を許されるが、日常臨床は研究テーマが臨床疾患を対象とするものでない限り、各自のあき時間で外来診療の見学、指導医のもとで検査の助手などを行っている。

長期指導の必要な博士課程指導は時間的にも無理なため、3名の修士コースの学生を指導することとした。日本の医科系大学ではない修士課程ということもこのコースの学生を引き受けた理由の一つである。

中国医大では同じ修士課程にも3種類のコースがある。一つは全く基礎研究をテーマとするもの、他に基礎研究30%~40%、残りが関連する臨床研究を行うコースと100%臨床研究のコースがある。私は3名には全て水晶体ないしは白内障に関する基礎・臨床の境界領域の研究課題を与えている。中国では全く新しい研究領域の一つである前眼部生体計測に関する課題を臨床研究が可能な二人に与えた。この目的には特殊な前眼部解析装置が必要なためこれまで私が使用していた装置の一つを再整備し、金沢医科大学より中国医大へ研究機器としての寄贈手続きをしていただき持ち込みが実現した。装置使用は熟練を要することもあり、予め昨年度内に同大学眼科の水晶体研究者（当時講師）を金沢医科大学眼科に招き十分な経験を積ませた。それでも研究を目的とした装置の稼動には時間を要し、第4回目の訪問時から正式な研究がスタートした。時間的にはまだ充分な余裕があるため1年後には、

私にとっても魅力ある幾つかの新知見が得られるものと確信している。

重要眼疾患の一つに「閉塞隅角緑内障」という適切な治療時期を失すると失明につながる疾患がある。白人に比べ東洋人（殊に女性）に多いとされ、事実私自身もここ数年の国際共同調査（アイスランド、シンガポール）でこれを確認してきた。同じ東洋人でも日本人と中国系シンガポール人間でも本疾患の頻度が明らかに異なる（シンガポール人>日本人）データも既に得ているが、今回からの訪中でこれまで経験した限り、その頻度は更に高そうな印象をもっている。加齢白内障発現も日本人との間には差がありそうである。研究は始まったばかりであるが発展が期待される。

基礎研究は中国医大眼科教室には私自身が直接指導する設備は全くない。これまでの中国医科大学の規定では修士課程の海外留学は認められていなかったが、学長、大学院担当責任者に金沢医科大学に学生を連れて行きそこの研究をさせたいと申し出たところ、金沢医科大学とは姉妹大学でもあると言うことで特別の許可を頂いた。本年9月から金沢医科大学の私の元でヒト培養水晶体上皮を用いた紫外線関連の白内障研究を開始したところである。

中国医大側からの望まれたことは、研究者としての基礎教育をどのような形でもよいから3年の過程の中でして欲しいと言うことであった。3年後には3種のコースについては私なりの修士課程学生教育への提言を試みたい（写真4、5、6）。

### Ⅲ、眼科学レジデントへの臨床教育 及び Ⅳ、眼科医師全般への臨床教育

当初は臨床教育としては研修医、一般医を分けた教育を考え、研修医へはこれまで私自身が金沢医科大学眼科で行ってきた眼科入門コース用の内容を、眼科医全般へは眼科教室員との間で行ってきたと同質の臨床検討会をしてみようと準備もし、実際何回か行ってみたが両コースでの反応はどちらかと言うと私が中心の一方通行的なものであった。

訪中計画の段階では全く予定していなかったものに日常外来診療がある。以前とは異なり現在の中国では外国人の医療行為は極端に制限されており、日常外来での患者診察・診断などを中国人医師と同レベルでは行えないことになっている。ところが二度目の訪中時に大学当局学から「外国人特別医師免許証」を渡された。大学の要望は一般外来で通常診断を行い、そこで診断を含めた医師、患者への指示、説明は勿論のこと、眼科医師、研修医の教育も同時にしたいとのことであった。少なくとも眼科領域では中国衛生部で初めて免許証が交付されたとのこと、そこまで準備も整えられていると最早お断りすることも出来ず、診療患者は大学で選択せず時間内の受診希望者は全て同等に受け付けて欲しい旨だけを私の希望条件として1回目の診療にのぞんだ。

それでも予め準備をしていたらしく初回診療日（8：00 開始）には10数名の受診者があった。診療器具は性能の悪い細隙灯顕微鏡と直像鏡のみ、後は何を要求してもほとんど基本的な検査器具の使用はできず、日本の保健所で検診をしているような状況であった。

しかし、そこで診察できた疾患内容は私の予想とは大きく異なるものであった。糖尿病患者は驚くほど多く、少ないと言われていたある種のぶどう膜炎、あるいは多くの閉塞隅角緑内障症例等々、研修医の指導、臨床検討の材料には事欠かないものがあることを知り、方法次第では期待にそえる臨床教育ができる手ごたえをもった。眼科医の多くは疾患そのものについての知識は充分もっているが、それを検出する診断の基本機器があまりにも貧弱なため単なる耳学問にとどまっていることも改めて

知った。しかし、日本でも全ての大学が未だもたないような高価な検査機器、手術機器を既に有していることにも驚きをおぼえた。早速次回の訪問から可能な限りの基本診断機器、薬品類を持参し続け現在に到っているが、未だしばらくは日本で行われているような診療システム準備には時間を要するものと思う。幸い、金沢医科大学をはじめ、周囲の多くの方々のご援助、ご協力を頂き予想以上の速さで目的達成に近づいており徐々に私の目指す臨床教育体制は整いつつある。

第5回目の訪中時に到り TV 画像を通して直接私の診察している外眼部、眼底その他の観察内容をその場で研修医、臨床実習を行っている学生に見せることができるようになり予定していた現場での臨床教育がほぼ可能となってきた。このような教育システムは中国では最初の試みとのことで、この意味では中国医大側の要望に多少は近づけたかと思っている。

4回目の訪問時あたりから私とともに患者診察にかかわる医師の患者を診る目、疾患への考え方も多少変わってきた感がある。医師の中から自分のかかえている問題の症例を積極的に提示する者が出始め、臨床検討の時間も必然的に増え、今回（5回目）の訪問から本来の目的とした研究指導に割く時間も少なくなり多少予定の変更を余儀なくされている。しかし、これも広い意味では長期滞場の目的の一つでもあるのでなおしばらくの間は訪中の度に様々な試みをしてみたい。未だ訪問の回数、臨床指導の回数も多くはないが、それでも大学内では多少変わった試みが始まったとの風評が広がっているようで、現場を見学に来られる大学関係者が増えている。私自身医学教育の専門家でないので多少のプレッシャーも感じ始めてきたことも否めないがこのままで続けてみたい。

今私がかかわっている大学が先進国並の眼科学レベルに達するまでには正直まだ高い壁が残されている。また、最新医学情報を容易に知る術を知る若手の医師の中にはこの遅れ、壁の高さを理解し、苛立ちを訴える者もいる。これらについては本来の事業報告と離れるので別の機会にでも述べてみたい（写真7、8）。

## V、中国医科大学眼科教室と金沢医科大学・環境研究所との共同研究準備

今年度から中国医大と頻回の交流を始めようと意図したことの一つに私自身が現在も継続中の研究課題（大気汚染と白内障に関する疫学的研究：国立環境研究所と合同で行っている国際共同研究）を中国でも行う予定であり、その準備を2001年度内に終了したいと考えている。

中国側の主研究グループは中国医大眼科学教室白内障研究グループと中国医大公衆衛生学教室で、目下その準備は順調に進んでおり、2002年度内には予備調査が瀋陽市内で行われる予定である。

## VI、地域（遼寧省、瀋陽市）眼科医への指導 {講演を含む}

中国医大関係者、金沢医科大学眼科への留学経験のある医師が遼寧省をはじめ中国東北各地の大学、主要病院で活躍している。私も中国医大客員教授として可能な限り、これらの施設での眼科医研修の催しに協力しようと思っている。

これまでに遼寧省省立眼病センター（張同センター所長も金沢医科大学眼科同門）主催の白内障研修会に私も講師として参加した。週末2日にわたる研修会ながら約300名の参加者があった。話題の中心は白内障手術（超音波手術＋眼内レンズ挿入術）でその熱気はわが国の12、3年前を思わせる

ものであった。現在全中国で眼内レンズ挿入術を施行できる術者は300名に満たないそうである。超音波手術までできる術者はその中でも限られている。本手術の普及は早いと予測するが、未熟な術者による重篤併発症の数も私の外来診療経験から推測すると中国全土には相当数いるのではないかと思う。眼科医に対する手術教育より海外の器械、人工レンズ業者のマーケット争いが先行している。日本での眼内レンズ挿入手術の導入から発展までの経過を実体験しているだけに、本手術の中国における正しい普及に求められる限り助言はしたいと思っている（写真9、10）。

## おわりに

恐らく私の助成金の使用内容はこれまで本助成を受けた方々とは異なる特殊なものであったかと思う。可能な限り訪中回数を増やし本年度に限らず明年度、更にはその後も前記の目標を大方達成するまで続けるつもりでいる。第1回目訪中時は助成金使用の詳細についての連絡を頂いてなかったため、第2回目訪中以降は航空券代金のみを使用させていただいた。第5回目訪中時は航空券代金全額の支払いまでは助成金の残額はなかったが、5回の訪中の援助をしていただいたことに改めて謝意を表したい。

なお本報告は助成金使用終了の第5回目までのものであることをご了解願いたい。